
株式会社異世界

霞正斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

株式会社異世界

【Nコード】

N6356W

【作者名】

霞正斗

【あらすじ】

総合学習の一環である「職場体験」を受けるため、とあるデパートを訪れた、中学二年生の大河と千沙。デパート店長の秋原成一から言われるがままに作業を続ける二人は、ひょんなことから、未知の異世界へ迷い込んでしまった。しかもその世界は、現実社会の「あるもの」が反映されたカオスなところで……？

1 職場体験（前書き）

この物語はフィクションです。実在する人物団体とは一切関係ありません。

1 職場体験

異世界への入り口というものは、そこらじゅうに存在するらしい。

異世界。別名パラレルワールドとは、我々の住む世界と並行して存在する、まったく次元の異なる世界の通称である。

そこへの入り口が、時として我が家の冷蔵庫の扉だったり、親戚の家のクローゼット奥だったり、パソコンのモニターだったり、10階以上あるエレベーターだったりするのだそうだ。

思春期の少年少女なら、誰でも一度は異世界への憧れを抱いたことがあるのではないだろうか。仲間を作って、敵を倒して、刺激に満ちた冒険を試みたい、と。

では、実際に異世界へ行ってしまった人間はどうなるのだろうか。

残念ながら、現実にそれを確認することは不可能に近いらしい。しかし代わりに、いくつもの創作物が、興味深い事例を示してくれている。

異世界で一年間過ぎたはずが、元の世界に戻ってみればたったの三分しか経っていないかったり。はたまた精神だけが異世界に飛んでおり、本体は病院で昏睡状態に陥っていたり。

そしてその筋の専門家によれば、それらはすべて、可能性として十分にあり得る話なのだという……。

「な！ どうよ、どう思う！？」

路線バスから降りた大河は、顔を真つ赤に興奮させ、前を歩く華奢な肩をつかんだ。

「だから異世界ってえのは、俺らの身近にあるものなんだって。つまりだな、この俺にも異世界を冒険するチャンスが十分に……いや、百分にある！」

手に持っている傘を、格闘ゲームのアクションのごとく、びゅんびゅんと振り回す大河。普段の通学路ならともかく、すぐ脇に大型ビルの立ち並ぶ立派な歩道において、彼の行為は周囲にとってあまりにも迷惑だった。

ワックスでとんがった黒髪を光らせながら、大河はもう一度、異性の同級生の肩をつかむ。

「な！ すげえよな！」

「くどい！」

ぶん！ と勢いよく大河の腕が振り払われる。同時に茶髪のポニーテールが大きく揺れ、大河の顔に直撃する。

「ぶがつ！」

「アンタさつきからずっとそればかりじゃない。異世界、いい世界ですって？」

「いや誰もそんな寒いギャグ言つてねえよ」

ポニーテールを当てられ、顔面がこそばゆい大河は、左手で頬を搔きながら口を開く。

「まったく、千沙は頭が固いぜ。いろんな意味で」

千沙と呼ばれた少女は、腕を組んで歩調を早める。

千早は女子にも関わらず、平均的な男子の大河よりも5cmほど身長が高い。そのせいか 実は無意識のギャグをバカにされたせいでもあるだろうが 大河の前を歩く彼女の後姿は、妙に威圧感を漂わせていた。

中学生二人組が、平日の真昼間に街中を歩いているなんてことは普通ならあり得ない話である。正しい中学生ならば、つまらなさそ

うに木製の机に頬杖をついて、シャーペンを握っているべき時間帯だ。

しかし、その日は違った。二人は“総合学習”の一環として、わざわざ街中まで出向いていたのだ。

「で、大河アンタ。今日は何をしに来たのか理解してるの？」

「デパートの職場体験だろ」

「そう、職場体験。段取りもバスの時刻を調べるのも全部わたし一人に押し付けられた職場体験」

「悪かったよ。ツンケンすんなって……」

千沙の隣に小走りで並ぶ大河。どうやら千沙が機嫌を悪くしているのは、異世界やギャグだけが原因ではなかったようだ。

「おわびに後でジュースおごるからさ」

「ドクターペッパーね」

千沙が即答した。

何度見ても、でっかいなあ。

これが二人の職場体験先であるヨミハシデパートを訪れた大河の、率直な感想だった。

ヨミハシデパートは、大河たちの住む県の中で、最大規模を誇る大手デパートである。衣料と食品の専門店街はもちろんのこと、レストラン、宝石店、高級化粧品店など、まさに“デパート”としての要素を詰め込んでいる、都市部の象徴的存在だ。

平日休日問わず、いつも女性客を中心に人だかりで賑わっていることで有名で、それは二人が訪れた日も例外ではなかった。

「で、どっち行けばいいんだっけ？」

不機嫌そうに去っていく中年の女性に頭を下げながら、大河は千沙に訊ねる。

別の若い女性を避けようと後ろに下がった拍子に、うっかり肩を

ぶつけてしまったのだ。

「サービスカウンターで待ってるって言われた。覚えてないの？」
千沙は相変わらず眉間にしわを寄せたまま答える。手にデパートの見取り図を持っている。

「あっちの角を右に曲がってすぐ。こここの店長さんがいるはずよ」
「店長……何て名前だっけ」

「アンタ、これから三日間お世話になる人の名前も忘れたの!？」
心底呆れた様子で、千沙はため息をついた。

「秋葉成あきはせいいち一さん。二度は言わないわよ」

「秋葉成一ね。おっけ」

秋葉成一は、温厚かつ気さくな男性だった。秋葉成一は大河と千沙に会うと、まず自己紹介とともに握手を求め、それから二人を事務所のような部屋へ案内した。

彼の背の低くふくよかな胴体の上には、垂れ下がった眉が特徴的な顔がのっかっている。店長という人の上に立つ役柄にしては、どうも物腰の低すぎる印象を、大河は受けた。

「どうぞ、座って座って」

ゆったりとしたソファを指差して、秋葉成一が言う。二人が連れてこられた部屋は、こぎつぱりとした質素な空間だった。一对のソファとテーブル、そして作業用のデスクが置かれているだけだ。

「紅茶でいいかな？」

「あ、はい」

湯気の立ち昇るティーカップが三つ、テーブルの上に置かれた。

秋葉成一は向かいのソファに腰掛ける。

「ここは一応店長である僕の部屋なんだけどね。粗末な所だろうか？」

「いえ、全然そんなことないです」

千沙が小さく首を横に振る。

「こぎれいで、いい感じですよ」

「ありがとう。じゃ、本題に入ろうか」

秋葉成一は微笑んでから、ティーカップに口をつけた。二人もそれに つられて、紅茶を一口すすする。紅茶の香ばしい風味と苦みが、大河の口の中に広がった。舌の上にピリツとした刺激が微かに走る。「今年からヨミハシデパートは、君たちの通う中学校の職場体験授業に、協力することにした。デパートみたいに大きな企業がこういうことをするのは珍しいらしいんだけどね。やっぱり君たちのような若い世代には、色々な経験を積んでほしいと思うわけだ」

「あ、ども」

大河は何となく気恥ずかしくて、軽く会釈する。

「とはいえ、大人数の生徒の面倒を見るのも大変だ。だから募集人数を二人だけにしたんだけどね。……まあ、まずは少し話をして、それから実際君たちに働いてもらう内容を説明しようか」

「わかりました」

「うん」

秋葉成一はティーカップを受け皿に戻し、二人の背後を指し示した。

「あれ、何だと思う？」

「秋葉さんのデスクですよね？」大河が答える。

「じゃなくて、その上に乗っているもの」

「……ファックスですか？」

「そう、ファックスだ」秋葉氏は頷いた。

「あのファックスには、毎日ひっきりなしに、様々なところから電話がかかってくる。お客様からの苦情とか、別の支店や本社や売り場からの連絡とかね。店長って役職は中途半端なものさ。上から下から外野から、数えきれない人種の人間と付き合いなきゃいけない。いわゆる中間管理職と似ているかな」

「はあ……」

話と言つよりは愚痴っぽいな、と大河は思った。

それから、ふと気づく。秋葉氏に最初出会ったときに感じた物腰の低い雰囲気、いつの間にか無くなっていることに。彼の地の性

格なのだろうか。

「すると当然、処理しなきゃいけない書類なんかも増えてくる。生憎、僕はそういう整理整頓が嫌いだね。大事な書類をなくしてしまつた、なんてこともたまにある」

「よくそれで店長まかせられてますね」

大河はうつかり、本音を口に出してしまつた。本音が口を突いて出てきたのだ。

「ちよつと大河！」

千沙がソファから数センチ飛び上がる。

しかし、当の秋葉成一は、何と微笑んでいた。

「僕はむしろ現場管理の腕を買われているんだ。書類云々なんかよりも、雰囲気づくりのほうが大切だつていう社の方針さ。まあ、ともかく」

そう言つて、秋葉氏はソファから立ち上がった。

「今の短い話から、今日から三日間君たちにしてもらうことが何となく予測できたんじゃないかな」

「え？」

大河は自分の耳を疑つた。ただの愚痴の何をどう推理判断すれば、職場体験の内容へたどり着けるのか、さっぱり理解できなかった。

大河は完全に困惑しきつて、隣に座る千沙の顔をうかがう。

そこには、自分とまったく同じ困惑の表情を浮かべる同級生が。

「つまり書類の整理整頓は、必ずしも店長である僕がやる必要はない仕事なんだ」

「……………」

秋葉氏はにこにこ笑いながら、デスクの裏側に回り込む。

デスクの一番下の引き出しが、きしんだ金属音を立てて開いた。

「そして一口に“仕事”といつても、接客応対や現場の見学だけが仕事じゃない。書類整理のような面倒くさい作業だつて、社会には山ほどある。いや、むしろそつちのほうが多い」

「……………」

どさり。乱雑に積み重なった書類の山が、デスクの上に置かれる。秋原氏はにこにこ笑っている。

「だから職場体験でも、そういう現実があることを知っておいたほうがいいと僕は思う。当然」

「……………えー」

千沙が恐る恐るといった様子で、ゆつくりと口を開いた。

「あの、それ、ひよっとして……………」

「安心して」

秋葉成一は、悪魔のごとく純粹な笑みを浮かべて、一枚のレポーター用紙を見せびらかした。

「“存在するはず”の書類リストは、あらかじめ作っておいた。君たち二人にしてみらうのは、“現実に”ある書類とリストを照合するだけの、簡単なお仕事だ」

大河はうず高く積み上げられた書類の山と、秋葉成一の丸い顔を交互に見つめる。

秋葉氏はにこにこ笑っている。

そして、自分の置かれている状況と彼の言葉から、ようやく導き出された結論は一つ。

つまり二人は、雑用を押し付けられたのだった。

2 便所の入り口

山積みの書類のてっぺんの用紙を右手に取り、そのタイトルを左手の用紙に書かれていている一覧と照らし合わせる。問題なく一覧の中に発見できれば、それぞれ内容に合ったブリーフケースに突っ込む。同じ作業を延々と続ける。

まったくもって無益だ。それこそ刺身の上にタンポポを乗せる作業と同じくらい、無益な労働だと千沙は思った。何が職場体験だ。これではただの雑用係だ。

めんどくさい。ああ面倒くさい。めんどくさい。

心底くだらない川柳を作ってしまった、千沙はますます気落ちする。そして、もつとユーモアのセンスを鍛えないと、と密かに誓う。

「ねー大河あ」千沙は顔を上げて言った。

「秋葉成一さん、なかなかお手洗いから戻ってこないね」

「おつきい方なんだろ、言わせんな恥ずかしい」

そう答える大河は、書類とは明らかに異なる書籍を手元に置いていた。文庫本ほどの大きさと分厚さで、安っぽい黒と赤の表紙が、千沙の目に入る。大河のことだからどうせコミックスかと思いきや、しかし、中身は二段組みの活字でいっぱいだった。

「こんなときに何読んでるの？」

「いいじゃん別に。秋葉さんが来たら隠すよ」

「何の本？」

「異世界の」

大河はそう言って、本を千沙に見せつけた。

「近所のコンビニに500円で置いてあったんだ。異世界の研究をしている同好会の話とか、実際に異世界へ飛ばされた人間の体験談とか、めっちゃ面白いぞ」

「そういうのって信憑性ないわよ？」

「いや、そうとも限らん。この本からはオーラを感じる」

大河は眉をきりつと寄せる。

「はいはい」

千沙が生返事をして再び作業へ戻ろうとしたとき、ドアが開き、秋葉成一が部屋の中へ入ってきた。

大河は慌てて本を足元のバッグにしまう。本人はさりげなく隠したつもりなのだろう。しかし、どう見ても後ろめたさ満点のあたふたとした動作で、作業をさぼっていたことは一目両全だった。だから言わんこつちやない。千沙は心の中で嘲笑う。

そんな大河を、秋葉氏は立ったまま生温かい目でじっと見つめる。

「大河君、だつたっけ？」

「は、はい？」

「それ、今隠したの、何？」

「げっ！」あからさまに動揺する大河。唇がふるふる震えている。

秋葉氏は遠慮なく彼のバッグに手を伸ばし、入り口からはみ出したモノを無造作に引き抜いた。

「ねえ、大河君」秋葉氏の声色はあくまで冷静だった。

「はい」

「こついつのに興味あるんだ」

「はい」

「大好き？」

「はい」

「いいね。この本の作成には僕も携わったんだよ」

「……………はい!？」

てつきり怒られるのだと思いこんでいた大河は、まったく予想外の言葉に、思わず顔を跳ね上げた。千沙もつい作業の手を止める。

秋葉氏はにこにこ笑っている。

「ほらここ、巻末の著者欄にある『パラレル同好会』。僕、これの会長なんだ」

「マジっすか!」

早くも反省の芝居をかなぐり捨てた大河が、ソファから勢いよく立ち上がった。

「大マジだよ。うん、興味があるなら都合がいい。やっぱり君たちにぴったりだ」

「ぴったり？ 何がですか？」

「あ、ちよつと待つて。君たちにはいいものを見せてあげるから」

君たち？ いつの間にか自分も異世界マニア扱いされていたことに、千沙は愕然とした。異世界なんて、自分は興味も糞もないのに糞といえば、千沙はふと思う。そうえいいえばさつきから、腹の調子が悪い気がする。腸から肛門のあたりにかけて、心なしか熱を帯びており、そして痛い。

ひよつとしたら、朝食の卵かけごはんが悪くなっていたのかもしれない。もしくは、昨夜飲んだ賞味期限切れの牛乳か。

一度意識し始めると、あとはひどくなるだけだった。しかし、年頃のうら若き乙女が職場体験先で「大便に行かせてください」などと頼んではならない……と、千沙は自分に言い聞かせる。結局、話を切り出す勇気がないだけの話なのだが。

「これはね」

一人腹痛に苦しむ千沙を差し置いて、大河と秋葉氏は異世界トクをはずませている。秋葉氏は、大河のコンビニ本とは別の書籍を手をしている。表紙が白く、サイズも縦に長い。新書と呼ばれる類の本だった。

「来週出版予定の、僕の著書だ。実は僕単独名義で本を出すのは初めてで……」

「それ、やっぱり異世界関係の本なんですか？」

「もちろん」

「すげー！」

「よければ、この見本を大河君にあげようか？」

「はい！ 喜んで！」

秋葉氏はにこにこ笑っている。

大河もにこにこ笑っている。

千沙は腹の痛みと格闘している。

「やったぞ千沙！」

「う、うん……よかったね」

「何だよ、しけた面しやがって」

大河は歯を食いしばりながら吐き捨てた。そんなに怒らなくてもいいのにと千沙は思う。お気楽なアンタと違って、こっちは腹痛に耐えるので精一杯なのよ。

「けど、今読んでほだめだよ」

秋葉氏が大河に優しく言った。

「今日君たちに与えられた仕事を、全部終わらせてからだ。社会人なら自分の余暇よりノルマを優先させるべき、わかるね？」

「ええ、まあ」

大河は体をそわそわ揺らしながら答える。その仕草に、千沙は妙な違和感を覚えた。本を読むことに期待して待ちきれないというよりも、むしろ何か別の感覚を必死にごまかしているような……。

「あの、秋葉さん」

大河が遠慮がちに言った。

「何？」

「仕事の前にトイレ行ってきていいですか？ すいません、ちょっと腹が痛くて……」

まさか。千沙は目を見張った。

「うん？ かまわないよ」

秋葉成一はドアを指差して言う。

「部屋を出て、通路を左にまっすぐ行くといい」

「ありがとうございます！」

大河はそう答えるなり、脱兎のごとく駆け出した。

千沙は一瞬だけ呆然となる。なぜ自分と大河がまったく同じタイミングで腹痛に襲われたのか。ただの偶然なのか。ひよっとして先ほどのしかめ面も、機嫌が悪かったのではなく、単に腹痛を我慢し

ていただけ？

疑問が渦巻くが、彼女はそんなことよりも、もっと生理的に切迫した状況に置かれていた。

腹がゴロゴロと唸り声をあげ、肛門は燃えるように熱い。チャンスは今しかない。

「秋葉さん！ わたしもお手洗い行つてきます！」

「どうぞどうぞ」

秋葉氏が答えるより早く、千沙は動いていた。しまりかけていたドアを思い切りはね除け、部屋を飛び出す。一刻も早く、この生き地獄から解放されるために。

秋葉氏は微かな笑みを浮かべている。

デパートの関係者専用通路を、中学生の男女二人が全速力で走っている様は、端から見ればこの上なく無様に違いない。「廊下を走つてはいけません！」と、教師の怒号が飛んできたとしても違和感がなさそうだ。そして、もしもそんなことを言われれば「漏れそうなんです！」と全力で言い返せると、千沙は変てこな確信を持っていた。

「なんだ、千沙もかよ！」

数メートル先を走る大河が、後ろを振り向いて言った。

「どうした！ 生理か！」

「いつぺん死ぬがいいわ！」

下腹部の筋肉に全身全霊を注ぎながらも、できるかぎりの嫌悪を込めて千沙は叫んだ。

「アンタと同じ！ お腹痛いの！」

「あーっそ！」

大河は再び前を向く。そのとき、彼の右手に何か白い物体が握られていることに、千沙は気づいた。

目を凝らして見れば、秋葉氏から渡された新書だった。

「何でその本！ 持って来てんの！」

冷や汗が吹き出るが、それでも千沙は訊ねずにはいられなかった。
「便座で読む！」

あまりにもくだらない答えに、千沙は怒りを覚えると同時に、吹き出しかける。

しかし、突っ込まない。突っ込む余裕など失われていた。臀部に込めた力を全力で保たなければならなかった。

通路の先に赤と青の二人の棒人間が姿を現したとき、千沙にはそれが天使のように見えた。

右手手前に女子トイレ、奥に男子トイレだ。

残り5メートル。大河の姿が、ぽっかりと開いた天国への入り口に吸い込まれた。千沙は最後のスパートをかける。

残り3……2……1……

右折！

刹那、白く光る清潔な壁と、立ち並ぶ押しドアが千沙の視界に飛び込んできた。

一瞬だけ立ち止まる。素早く状況を把握する。どこの個室も空いている。

迷わず、一番近いドアをつかむ。右腕を軸に身体をねじり回し、全身を投げ入れる。

素早く鍵をかけ、スカートのフォックに手をかける。

そして待ち受ける便座へと

「助かった……」

無意識のうちに、千沙は声を発していた。すべて終わったのだ。

今、千沙はこの上ない解放感に満ち溢れていた。

銀色のレバーを押し、スカートを履きなおす。もう一度、大きなため息を吐き出す。

あとはここから出るだけだ。早く部屋に戻り、作業を済ませてしまおう。千沙はそんなことを考えながら、鍵を解き、ドアを引いた。目の前には雑木林が広がっていた。

低木から広葉樹まで、黄色く色づいた木々が、お互いにほど良い間隔を保ちながら、どこまでも続いている。頭上からは木漏れ日が降り注ぎ、腐葉土の地面をモザイク状に彩っている。どこか遠くの方から野鳥の鳴き声が聞こえる。そよ風が吹くと、葉の擦れる乾いた音が空間を支配した。息を吸うと、街では味わえない自然独特の香りが、胸を一杯に満たした。

千沙は何も考えられなかった。思考停止とはまさにこのことで、「ここはどこなのか」という疑問さえ浮かんでこない。ただ、心地よい雑木林の空気に、すっかり呑み込まれてしまっていた。

「すげえ……」

不意に、横から男の声が聞こえてきた。その方向に顔を向けて初めて、声の主が大河だという事実が気が付く。大河は千沙から数歩離れた場所に立っていた。ちょうど男子トイレと女子トイレの間くらいの距離だな、と千沙はぼんやりと考える。

大河の瞳は、太陽よりも輝いていた。彼の右手には、開かれた本が力強く握られている。

秋葉氏の記した新書だ。

「ここ、どこなの？」

千沙は小声で大河に訊ねた。自分ではない別の誰かがしゃべっているような不思議な感覚に囚われる。

「異世界だよ」

大河は千沙の顔をまっすぐに見て、静かに答える。

「俺たち、異世界に来たんだ」

3 異世界の住人（前書き）

最近、内容がどんどん変態チツクになっているのは気のせいだと思
う。

3 異世界の住人

「異世界？」

千沙は訊ねる。

「異世界だ」

大河はオウム返しに言う。普通の人間にとって無縁であるはずの、その単語を、いとも簡単に。

「何を根拠に」

「根拠はない」

「だったら」

「異世界だよ、ここは」

「ふざけてないで」

「ふざけてないさ」

「いいえ、ふざけてるわ」

千沙はそういって、両手を広げてみせる。

「うん、確かに信じられないことは起きている。トイレの個室から出たら、デパートの廊下じゃなくて林だった」

「だな」

一面に広がる雑木林をゆっくりと見渡す大河。木漏れ日に照らされた彼の明るい表情を見ると、千沙は無性に腹が立った。

相当異常な事態なのにも関わらず、なぜ大河は平静を保っているのだろうか。

「でもね、これがたとえば秋葉さんのしわざじゃないって、どうして言い切れる？」

「秋葉さんのしわざ？」

「そうよ」

千沙は語気を強める。

「何かすごい仕掛けを作れば、トイレの個室だけを外に持っていくことができるかもしれないじゃない。トイレの場所を教えてください」

のも秋葉さんだったし、それで、わたしたちを林のなかに置いて、
本当の職場体験が何かさせようよと……」

千沙がそこまで言ったところで、突然、大河が吹き出した。
腹を抱えて、ゲラゲラ笑い始める。

「何が可笑しいのよ」

「お前、それ本気で言ってるのか？」

大河は笑いすぎて呼吸を続けるのも苦しそうだった。

「……まあ少なくとも、ここが異世界だってホラ話よりは本気ね」
「あんな、後ろ見てみるよ」

後ろと言われ、千沙は特に意識せず背後を振り返った。

そして、信じがたい事実を目の当たりにした彼女は、危うく卒倒
しそうになる。

本来、千沙の背後には扉が存在するはずだった。つい先ほど彼女
がぐぐった、トイレの個室の扉がなければならぬのだ。

しかし、そこには何もなかった。

扉はおろか、扉を連想させるような特別なものも、何もない。周
囲の大地と変わらない落ち葉と腐葉土だけが、すました様子で横た
わっている。

「扉はどこに行ったの？」

千沙の顔から血の気が引いていった。

「何なのよ、一体」

「消えたんだ。そう考えるしかない」

「でも、ひよっとしたら、わたしたちを降ろしてからどこかに飛ん
でいったのかも……」

「まだ言うか」

大河はあきれ気味にため息をつく。

「現実を見るよ、千沙。扉は俺たちを残して消えたんだ」

「……わかった、わかったわ」

深呼吸をして、必死で落ち着こうとする。

冷静になれ。何が起きているのか論理的に考えるのよ、私。

「百歩譲って、不思議な力のせいでトイレから変な場所へ来たことは認めるから。でも、ここが異世界だって確証は一つもないでしょ？」

初めて、大河がうるたえた。興奮のあまり、異世界以外の選択肢など頭の中になかったようだ。

まったく、どこまでお気楽なんだか。千沙は内心あきれ果てる。

「ま、まあな」

「周りを見てよ。どこからどう見ても“ただの”雑木林じゃない。単に私たちは知らない場所にワープしてきただけ、って捉えた方が自然だよな」

千沙はそう言ってから、もう一つのある可能性に思い当たった。

ついさっき自分は、この事態が「秋葉さんのしわざ」ではないかと疑った。彼がとんでもない仕掛けを作ったのかもしれない、と。

人間に起こせない超常現象ということ、大河にはすぐ否定された。しかしこれは、可能性として充分にありえるのではないか。二人そろつての腹痛を秋葉さんが想定していたとは考えにくい、自分たちをトイレまで誘導したのは、紛れもなく秋葉成一なのだから。思い返せば、秋葉成一は自らをパラレル同好会の会長だと名乗っていた。さらに、個人名義で本を出版する程度には、その分野に精通しているらしい。大河の右手に握られている白い新書が、何よりの証拠だ。

ならば大河の言うとおり、この世界が本当に異世界だとしたら。

もしかしたら。

千沙は口を開いた。

しかしその言葉は、別の声によってかき消されることになる。

雑木林全体に鳴り響いた金切り声に、二人は身を固くした。

甲高い、涙ぐんだようなその声は、どうやら子どもが発したもののようだった。

千沙はすぐに嫌な予感に包まれる。過去にそっくりな叫び声を耳

にしたことがあるからだ。

中学校の着替え中の出来事だった。体育の前に男女で教室を分かれて着替えていたところ、下心に負けた男子生徒数人が、こっそりドアの隙間から中を覗いていたのだ。

そのとき最初に彼らを発見した女子があげた金切り声と、トーンが完全に一致していた。

驚愕と、嫌悪と、羞恥の入り混じった叫びだ。

「ねえ、あの声」

「待って！」

話しかけようとした千沙は、再び言葉を遮られた。

目を細くした大河が、黙って声の方向を指差している。千沙が目を向けると、林のはるか向こうで、小さな人影が動いているのが見えた。

重なる木と雑草が邪魔になって、どんな外見かまでは判断できない。しかし時間が経つにつれ、次第に影が大きくなっていく。二人のほうへ確実に近づいている。

「えっ……」

ひたいに手のひらを当てて眺めていた大河が、不意につぶやいた。

「何？ 何か見えたの？」

「ちよい待て。いや、やっぱりあれは……」

視力3.0。これといって特技のない大河の、唯一とも言える長所だった。

その驚異的な視力で、大河は目にしてしまったのだ。

「千沙」

「どうしたの改まって」

「俺が正しかった。ここは異世界だ」

今度の大河は、先ほどとは違った。熱に浮かされた妄言ではなく、確固たる自信に溢れた口調だった。

その一方で、一切の興奮が失われている。

「あれは、ただの人間じゃない」

「……どんな風に？」

千沙が小声で訊ねると、大河はごくりと生唾を飲み込んだ。あたかも名伏しがたき冒流的な何かを見つけてしまったかのごとく、それを友人に教えるか否かを判断しかねている。普段の大河らしくなかった。

しかし、それも一瞬の出来事だった。覚悟を決めた大河は、ゆっくりに言葉を紡ぐ。

「あいつには、尻尾が付いてるんだ」

“人間に尻尾が付いている”。

それがいかに不気味な現象であるのかを、千沙は甘く見ていた。想像してみるといい、尻尾の生えている人間の姿を。悪魔のように黒く細い尻尾ではない。馬のように長い毛がしなだれた尻尾でもない。ましてや猫のコスプレのように、白くふわふわした尻尾でもない。

端的に言えば、肌色の長い肉棒だった。

こう表現すると卑猥な連想をしてしまう人も少なからずいるだろうが、実際、それを目にした千沙と大河は、真っ先に同じものを思い浮かべてしまっていた。

二人の目の前に現れた尻尾は、おおよそ人の前腕ほどの長さだった。直径約5cmの肌色が、ちょうど人間でいう尾骨のあたりから一様な太さで伸びている。途中で綺麗なSの字を描き、先端は丸いドーム形で終わっている。目に見える毛が一切生えていないので、皮膚がむき出しだ。見方によっては、かなりグロテスクかもしれない。

そして尻尾の持ち主は、今や二人の数メートル手前まで迫っていた。

それは、まだ幼い子どもだった。年齢は6、7歳だろうか。柔らかい黒髪と温厚そうな顔立ちの、ちっちゃい男の子だ。尻尾が付いていることを除けば、ごく普通の幼児に見える。

一方、男の子の置かれている状況は、どう見ても普通ではない。彼はトランクス一丁、つまり全裸に近い格好で、ベソをかきながら二人のほうへ走ってきたのだ。

「助けて！」

千沙と大河に向かって、男の子が叫んだ。切迫した涙声だった。

「追われてるんだ！」

「だ、誰に？」

反射的に千沙は聞き返した。尻尾と格好に対する抵抗感を、無理やり頭の外へ追い出して、そばに駆け寄る。ともかく、困っている子供を助けるのが先決だ。

「ケモノ！」

男の子はそう答えるなり、千沙の背後にすばやく隠れた。服の裾を握りしめ、ぶるぶると震えているのが、じかに伝わってくる。よほど恐ろしい相手なのか。

何せ、ここは異世界だ。千沙は半ば認めていた。人間に尻尾が生えているくらいで、どんな化け物が出てきても不思議ではない。

「それ、お姉ちゃんとお兄ちゃんでも勝てそうな相手かな？」

「わかんない！ でもあの人の狙いは僕だから、ここに来たら、はぐらかして！」

あの人、というからには人間なのかしら。尻尾の生えている人間を果たして人間と呼んでいいのかは別として、怪物のような、物理的な意味で手に負えない相手というわけではなさそうだ。

「大河！ 誰か来てるか見える？」

「ああ、いるな」

しかし、林の先を見つめる大河は、割と冷静なまま答えた。

「こっちに歩いてくる、若い女の人が一人。別に変な人には見えな
いけど」

「そうなの？」

千沙はやや拍子抜けする。

「で、手に服みたいなのを持つてる」

すると、男の子はますます身を縮めた。

「やっぱりあれを僕に着せる気なんだ！」

「あれ？」

大河と千沙は同時に首をかしげた。

「メイド服だよ！ 変な動物の耳が付いてる！」

「……えっと」

どうも、話がおかしくなってきた。

ケモノ？ 女の人？ メイド服？

千沙は男の子の前にしゃがみこんで、できるだけ優しく語りかける。

「落ち着いて答えてね。君を追いかけているのは誰で、何が起きているのか私たちに詳しく教えてもらえないかな」

男の子はこくりと頷く。

「あの人は僕と一緒に住んでて、お世話をしてくれるお姉さんだよ。いつもは優しいんだけど、ときどきあんな風にケモノみたいな目になって、変なことを僕にさせようとしてくるんだ」

「それって……」

千沙と大河は目を見合わせる。

例の女の人は千沙にもはつきりと見える距離まで近づいていたが、もはや逃げるつもりも戦うつもりもなかった。

「シヨタコン？」

大河が言った。

「何それ？」

千沙はその単語を知らなかった。

ただメイド服を身に着けた男の子を想像してから、なるほど、ありかな、と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6356w/>

株式会社異世界

2012年1月5日01時46分発行